

非ルクセンブルク人が ルクセンブルク語創出に及ぼした影響について

田原憲和

Summary

* Zënter den Antoine Meyer seng éischt Gedichtsammlung *E Schrëck op de Lëtzebuenger Parnassus* op Lëtzebuergesch geschriwwen huet, gi vill lëtzebuergesch Bicher bis haut publizéiert. Am Ufank vun der Geschicht vu Lëtzebuergesch hunn zwee net-Lëtzebuenger – den Heinrich Stammer an de Friedrich Georg Weiß – eng wichteg Roll gespillt. An dësem Aufsatz gëtt dat kloer gemaach, wéi a wéi wäit si d'Entstoung vun der Sprooch beaflosst hunn oder beaflosse konnten.

キーワード：ルクセンブルク語の成立，非ルクセンブルク性，ハインリッヒ・シュタンマー，ポリヒュムニア団，ゲオルク・ヴァイス

1. はじめに

ルクセンブルクにおいてルクセンブルク語は、フランス語及びドイツ語と並び公用語の1つであり、加えて唯一の国語 (langue national) でもある。歴史的にルクセンブルク語はドイツ語の方言の一部とされてきたが¹⁾、1984年のいわゆる「言語法」により公用語及び国語の地位が付与された²⁾。しかしながら、この法律の制定によって言語の使用域が劇的に変化したわけではない。国民の母語として、そして話しことばとして使用されてきたルクセンブルク語と、書きことばとして使用されてきたドイツ語及びフランス語の関係は当面維持されることになる³⁾。

ヨーロッパの代表的な多言語国家といえばスイスの事例がよく知られているが、ルクセンブルクの状況とは対照的である。スイスではドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の4言語が公用語であり、それぞれの言語が使用される地域は明確に区分される。その一方ルクセンブルクでは基本的にすべての地域で伝統的にルクセンブルク語が母語として継承されており⁴⁾、地域間で言語の相違はない⁵⁾。かつてはフランス語が、そして現在はドイツ語とフランス語が外国語として学ばれ、学校や社会活動における言語として使用されているのである。

ルクセンブルクは1815年にルクセンブルク大公国としてフランスから独立している。当時はフランス語圏 (現在のベルギー・リュクサンブール州) とドイツ語圏 (ルクセンブルク語圏) からなる国であった⁶⁾。1839年にフランス語圏を喪失してからも、ルクセンブルクはフランス語を公用語として維持している。当時のルクセンブルク人にとっては、自らの言語であるドイツ語と、国際的に高い威信を有するフランス語という2言語間の対立が常に顕在化した状況にあった。そのため、ドイツ語内部の相違、すなわち、土着の方言であるドイツ語ルクセンブル

ク方言やその特徴に目が向けられることはなかった。

そうした中で、ルクセンブルク語創出の種を蒔いたのが、非ルクセンブルク人であるハインリッヒ・シュタンマー (Heinrich Stammer) 及びフリードリッヒ・ゲオルク・ヴァイス (Friedrich Georg Weiß) である⁷⁾。彼らが蒔いた種が、後のアントワヌ・マイヤー (Antoine Meyer) やディックス (Dicks) の活動につながり、開花したのである。本稿では、ルクセンブルク語創出に重要な役割を果たしたこの2人の非ルクセンブルク人に焦点を当て、再評価することを目的とする。

2. ルクセンブルク語の「発見」と「普及」

2.1 マイヤーによるルクセンブルク語詩

上述のように、ルクセンブルク語は伝統的に話しことばとして使用されてきたため、書きことばとしての歴史は浅い。書きことばとして近代ルクセンブルク語が用いられ始めたのは19世紀のことであり、それも散発的であった。そうした中で1829年に初めてルクセンブルク語による詩集 *E Schrëck op de Lëtzebuenger Parnassus* (以下 *Schrëck* とする) が出版された。これを執筆したのが当時オランダのブレダの軍事アカデミーで数学教授を務めていたマイヤーであった。

Schrëck は恋愛詩が3篇と寓話が3篇、合わせて6篇の詩を取めた全53ページの詩集である。また、これらの詩に加え、前書きでルクセンブルク語の綴り方について、後書きでルクセンブルク語の文法についても記述している。ここでの記述は分量の面でも内容の面でも十分とはいえない。それでも、ルクセンブルク語の客観的な記述を行ったという点は、この後のルクセンブルク語発展の過程において重要な役割を果たしているといえる。

Schrëck 出版の3年後となる1832年、マイヤーは2冊目となる詩集を出版する。それが *Jong vum Schrëck op de Lëtzebuenger Parnassus* (以下 *Jong* とする) である。*Jong* は4篇の詩と前書きから合わせて全18ページと *Schrëck* と比較してかなり薄い冊子である。その後、1845年にはフーベルト・グローデン (Hubert Gloden) とともに詩集 *Luxemburgische Gedichte und Fabeln* を、さらに1853年には *Oilzegt-Klång* を出版している。

このように、マイヤーの詩人としての活動はルクセンブルク語にとって重要な役割を果たしてきた⁸⁾。また、*Schrëck* の前書きでルクセンブルク語の綴り方に触れていたが、1854年にはルクセンブルク語初の正書法集 *Règelbüchelchen vom Lezeburger Orthoëgraf* (以下 *Règelbüchelchen* とする) を出版している。*Règelbüchelchen* には様々な問題点や不十分な点が含まれており、これ自体としての評価は決して高くない。しかしながら、これを機にルクセンブルク語正書法論議が活性化され、翌年の1855年にはディックスによる正書法が発表された⁹⁾。この正書法を簡略化したディックス／レンツ正書法はこの後19世紀から20世紀初め頃にかけて、詩や文学、さらには雑誌や新聞などで広く用いられることとなる¹⁰⁾。

2.2 国民のことばとしてのルクセンブルク語

マイヤーをはじめとする詩人らがルクセンブルク語による文芸活動を開始したことは、ルクセンブルク語のドイツ語からの離脱の第一歩であり、両言語が分岐していく過程における1つの歴史的な事象である。当初はこれらの作品が広く普及したとはいえないが、これまで当然に

ドイツ語圏に属すると認識されていたルクセンブルク語が、文芸活動の開始によりドイツ語とは異なるものとして可視化されたのである。

書きことばとしての、あるいは文芸語としてのルクセンブルク語の普及に大きく貢献したのがディックスの劇作家としての活動である。ディックスは1849年に設立された体育協会 Gym に属していた。Gym は身体的要請と民族精神の強化を目的としており、その一環として文化的活動にも力を注いでいた。ディックスは Gym を通じて自らの作品を世に送り出し、Gym のメンバーとともに国内各地で上演した。複数の新聞の書評からも伺えるように、ディックスの作品は好評を博していた¹¹⁾。ディックスが生み出した戯曲は、大衆に広く親しまれた初のルクセンブルク語による創作物といえる。

マイヤーとディックスに共通しているのは、「我々のことば」「ルクセンブルクのドイツ語」で創作するという姿勢である。マイヤーは *Schréck* の前書き及び後書きで明確に「我々の方言」と述べている。ディックスも正書法集 *Versuch* のタイトル『ドイツ語ルクセンブルク方言正書法の試み』からわかるように、あくまでもドイツ語という枠組みの中でのルクセンブルク性を追求している。

ルクセンブルクという国家あるいは民族の言語としてのルクセンブルク語ということ意識して、公式の場でのルクセンブルク語使用を試みたのがマティアス・シュポー (Mathias Spoo) であった。彼が1896年の国会議員就任演説をルクセンブルク語で行ったことで国会での使用言語についての論争が起こった。この時はルクセンブルク語の使用は容認しないということで決着したが、その一方で、ルクセンブルク語を初等教育へ導入するというシュポーの発議は実行に移された¹²⁾。

このように、19世紀のルクセンブルクは、ルクセンブルク語というものがドイツ語とは異なるもの、我々のことばであるということが「発見」され、それが徐々に大衆へ、そして政治家へと広まっていく過程の只中であつたといえる。

3. ハインリッヒ・シュタンマーとマイヤー

ルクセンブルク語文芸活動の祖ともいえるマイヤーの活動の動機はどこにあつたのか。マイヤーの一連の活動は、ハインリッヒ・シュタンマー (Heinrich Stammer) との出会いがその源泉である。ここでは、シュタンマーとはどういった人物なのか、マイヤーの活動にどのような影響を及ぼしたのかを探る。

3.1 ハインリッヒ・シュタンマーとアテネ・ド・リュクサンブール

シュタンマーは1785年12月22日、ドイツのボッパルトで誕生した¹³⁾。ボッパルトでラテン語学校に通い、その後はトリアの神学校で哲学や神学、修辞学を学んだ。1810年から1811年にかけては、ヴィースバーデンのヨハネス・ド・ラスペ (Johannes de Laspée) やヨハン・ハインリッヒ・ペスタロツィ (Johann Heinrich Pestalozzi) のもとで、教授法を学ぶとともに、教師としての経験を積んだ。そして1817年、ルクセンブルク市にある中等教育機関 *Athénée de Luxembourg* (以下アテネ校) でドイツ語教員のポストが新設され、シュタンマーが採用される

に至るのである。

この時期のアテネ校をめぐる言語の状況は複雑である。1804年から1814年までのフランス統治下では、ドイツ語がアテネ校の授業言語であった。その後1817年までは引き続きドイツ語が授業言語としての地位を維持していた。しかし1817年以降はフランス語が唯一の授業言語となり、近代言語で2番目の必修言語としてオランダ語が教えられた¹⁴⁾。ドイツ語は自由選択科目の地位に格下げされたのである¹⁵⁾。1815年のウィーン会議の合意に基づきルクセンブルクが独立し、ドイツ連邦に加盟したが、プロイセン軍がルクセンブルクに駐留することに対する反発が背景にあり、ルクセンブルク大公ギョーム1世がドイツとの距離を取ろうとしたとされている。しかし、一方には国内にドイツ語を支持する勢力も存在しており、ドイツ語の授業言語としての地位を下げることに引き換えにドイツ語教員のポストが新たに設けられたのである。

その後、シュタンマーは1851年までアテネ校でドイツ語やドイツ文学の教育を行った。シュタンマーの教育理念や方法はベスタロツィから受けた影響が大きく、感性を重視していた¹⁶⁾。シュタンマーは1818年と1823年に讃美歌集を編纂し出版している。当時のアテネ校では音楽や歌の授業が開講されていなかったが、シュタンマーは音楽が学習促進に効果的であるという考えを持っていたのである。加えて、読み書き能力獲得のためにも同様に感性が重要であると考えていた。シュタンマーのこのような教育理念のもとで育ったマイヤーらが、のちのルクセンブルク語文芸活動の黎明期を支えていくこととなる。

3.2 幻のルクセンブルク語詩人、テオドル・レンツ¹⁷⁾

シュタンマーのドイツ語の授業では、言語表現、それも文字での表現を重視しており、例えば1820年の試験では物語や寓話、歌をルクセンブルク語で創作するという課題が与えられていた¹⁸⁾。初めて近代ルクセンブルク語が書きことばとして使用されたのは1821年4月14日付のLuxemburger Wochenblatt第2号に掲載された*Gespräche über das Luxemburger Wochenblatt*という記事である¹⁹⁾。シュタンマーは書きことばとしてルクセンブルク語が登場するよりも前から、ルクセンブルク語による創作活動を推進していたことがわかる。

のちにルクセンブルク語で初の詩集である*Schréck*を出版することになるマイヤーもシュタンマーのこのようなドイツ語の授業を受けた生徒の一人である。しかし、ルクセンブルク語の文芸活動を考察する上で忘れてならないのは、マイヤーの同級生でもあるテオドル・レンツ(Theodor Lenz)である。

テオドル・レンツは1801年、ルクセンブルク中部のメルシュ郡北東部に位置する小村シュロントヴァイラーで生まれ、アテネ校で学んだ後、リエージュ大学の学生であった1823年にこの世を去った。

テオドル・レンツはアテネ校在籍時よりその才能を発揮していた。シュタンマーが1818年に編纂した讃美歌集に、テオドル・レンツが17歳の時の作ったドイツ語詩歌が収められている²⁰⁾。テオドル・レンツのルクセンブルク語による作品が世に出されたのは、1843年から1866年にかけてヨハネス・マティアス・フィルメニヒ(Johannes Mathias Firmenich)によって編纂された*Germaniens Völkerstimmen – Sammlung der deutschen Mundarten*においてである。

ここでフィルメニヒはあとがきに協力者一覧を掲載している。フィルメニヒはドイツ語圏の

各地の方言や物語等を収集するという活動の一環で、ルクセンブルク語（ドイツ語ルクセンブルク方言）の資料も収集した。ドイツ語圏の各地域の資料もそれぞれの地域の協力者によって提供されたようである。そしてルクセンブルクにおける協力者としてマイヤーとテオドル・レンツの名を挙げている²¹⁾。

フィルメニヒはルクセンブルクの方言の資料として、537 ページから 543 ページにかけて合わせて 17 編の詩を収録している。このうち、14 編の詩はあとがきの協力者一覧で挙げられていないジャン・フランソワ・ガングラー (Jean-François Gangler) の詩集から取られたものである²²⁾。残りの 3 編の詩の作者について明確なことは判明していない。しかしながら、あとがきで名前の挙げられているテオドル・レンツあるいはマイヤーのいずれかであると考えるのが自然である。

ロジェ・ムラー (Roger Muller) はこの作者不詳の詩 3 編の詩は同一人物によるものであり、ルクセンブルク語表記法の特徴から、これらはテオドル・レンツが書いたものであるとしている²³⁾。ガングラーやマイヤーはルクセンブルク語首都方言の特徴が強く見られる表記法を使用しているが、作者不詳の詩で使用されている表記法 *ië*, *oë*, *ou* および *ei* は首都方言の特徴とはかけ離れており、ガングラーやマイヤーの表記法とも異なるのである²⁴⁾。

仮にこれがテオドル・レンツの作品だとすると、近代ルクセンブルク語で書かれた初の詩である。ただ、ここで重要なのはどの詩が最も古いものかということではない。1821 年の *Luxemburger Wochenblatt* の記事でルクセンブルク語が使用される以前から、シュタンマーのもとではルクセンブルク語による創作活動がすでに始まっており、それが後のルクセンブルク語発展の礎となったということこそが重要なのである。

3.3 ポリヒュムニア団の活動

ドイツ語教員として赴任し、ドイツ語やルクセンブルク語による活動を推進したシュタンマーは、その門下生から非常に慕われていた。それはシュタンマーの門下生の一人で、ドイツ語詩人のルートヴィヒ・マルシャン (Ludwig Marchand) の詩からも読み取れる。

「1825 年 7 月 15 日の洗礼名の日に際し、我らが友であり師であるハインリッヒ・シュタンマーに捧ぐ」と題された 36 行の詩で、マルシャンは怖気づく自分たちに勇気と目標を与えてくれたこと、常に努力することが向上につながることに気づかせてくれたことといったシュタンマーの教えに感謝を捧げている。さらに、創作の楽しさ、感じとること、人生の楽しさなど、授業を通じてシュタンマーから学んだことを綴っている。そして自分たちのシュタンマーへの愛がいつまでも忘れられないようにという祈りの言葉で締めくくられている²⁵⁾。

マルシャンやマイヤーのように、アテネ校でシュタンマーの影響を強く受けた門下生は、アテネ校を卒業した後もシュタンマーが主宰するサークルに参加し続けた。ポリヒュムニア団 (Bund Polyhymnia) と名付けられたこのサークルは、マルシャン、マイヤーの他にも、後にアテネ校の教師となったニコラ・ボドソン (Nicolas Bodson)、ヨゼフ・クラウゼナー (Joseph Clausener) にも参加していた。

ポリヒュムニア団のメンバーは年に一度ルクセンブルクに集まり、高い理想や友情、祖国愛、美・善・真実に対する情熱を高め合うこと活動をしていた²⁶⁾。1827 年のポリヒュムニア団の集

まりに際し、マルシャンが書いた Aufruf（呼びかけ）と題する詩の形式をとっている告知文が、この活動の目的やサークルの位置付けなどをよく表している。

同志らよ！この神聖なる団に
我らは新たに結集する
ドイツの精神が重なり合う
偉大なる瞬間に祝福を！
喜びに我らの頬が紅潮する！
熱情に我らの心が鼓動する！
始まりのグラスを掲げよう
視線は空の向こう側へ

（合唱）

誓いを守り感謝せよ
我らを美なるものに結びつける団に
慈愛に満ちた手を差しのべよ
冷めることなき忠誠心！

人は偉大なことを成し遂げられる
己の力を知り尽くしている限り
時を越えてつながり合う
真実の光が灯るところ
燃ゆる欲望の赴くまま
渦巻く魂が求めている
鷲は翼を授かった
土の中ではミミズがうごめく

（合唱）

勇気を出して飛び上がろう
熱い胸の鼓動が
同志らよ！空の向こう側へ
弱気なものなどいやしない

善き心の君主に祝福あれ
彼の富が闇を照らし
知の鮮やかな彩りが
王位を堅固なものにする
温かな慈愛のまなざしを
投げるはこの地の民のもと
芸と美とを祝うため

友情で我らは固く結び合う
祖国から遠く離れても
輝く目標に向かいつつ
若者は胸に刻み込む
我らが望み、編んできた
この広い世界の中で
誇り高き精神が
賤民のもとから流れ出る

（合唱）

目標を勝ちとろうとする者に祝福あれ
この広い世界の中で
卑しい庶民の間から
勇気よ、舞い上がれ！

同志らよ！若き血潮が漲るぜ
熱い血よ、荒々しく流れゆけ
運命を恨むことをせず
悦びと愉悦は我らの元に
高尚な心を持って生きようぜ
美なるものために燃えあがろう
神は我らに力を与えてくれた
祖国に捧げるこの力を

（合唱）

神話は我らに力を与えてくれた
祖国に捧げるこの力を
同志らよ！心と体で誓うのだ
祖国のために生きることを

王が生まれたその日のごとく
我らが団もそうあろう
この素晴らしい時に手をかける
友よ、手と手で愛をつなごうぜ
光り輝くこの地へ呼び集める
神が世界を導くところ
我らの団の庇護をする

自ら建てるはパンテオン

(合唱)

満ちた杯を回し飲もう

顔を合わせて笑うのだ

ウィレム王にグラスが回る

善良で賢明な王様に

神から我らに祝福を

(合唱)

偉大なる無名の者よ

誓いの意味を理解する

神は天上の高みより

我らの祖国に祝福を

このマルシャンの詩は非常に情熱的であり、また、愛郷心、愛国心に満ちている。シュタンマー門下生の同窓会的な集まりというよりは、むしろシュタンマーの影響を受けた若者たちがルクセンブルクの現在、過去を肯定し、この国の未来のために共に歩んでいこうという誓いの場であったといってもよい。ここで重要なキーワードの1つに「美」がある。第1連では「我らを美なるものに結びつける」(Der zum *Schönen* uns verband), 第4連では「美なるもののために」(Für das *Schöne*) のように、「美しいもの」の総体を表す *das Schöne* という語が用いられている。この他にも、第2連の「輝く目標に向かいつつ」(Um die *schöne Zeit* gerungen), 第6連の「素晴らしい時に手をかける」(Reicht in dieser *schönen Stunde*) という「美しい」「素晴らしい」を表す形容詞 *schön* が用いられている。

ここでいう「美」とは、芸術全般というよりはとりわけ賛歌や物語などの文芸を示している。それは、ポリヒュムニア団という名称に現れている。ポリヒュムニアとは、ギリシャ神話の女神の1人であり、賛歌と雄弁を司るとされる。上述のようにシュタンマー自身も讚美歌集の編纂をしたり、生徒に詩や物語を創作させたりと、シュタンマーの活動そのものが団の名称として象徴的に用いられていると考えられる。

第5連と第6連では、君主であるウィレム王(ギョーム大公)²⁷⁾を讃えている。同時に、第6連の最後の合唱の部分では自分たちを「偉大なる無名の者」(*der große Unbekannte*)とし、神から与えられた力を祖国のために捧げよう(第4連第7-8行)と誓いの言葉を述べている。

このように、理念的、あるいは精神的には保守的でありつつも、これまで行われてこなかったルクセンブルク語による文芸の推進といった斬新な活動を進めていくのである。なお、シュタンマーがポリヒュムニア団を立ち上げたのは1823年のことである。この年、シュタンマーの愛弟子であった卒業生のテオドル・レンツがこの世を去っており、それがポリヒュムニア団結成のきっかけとなったとされている²⁸⁾。

4. ゲオルク・ヴァイスとルクセンブルク語詩

すでに述べたように、1821年4月14日の *Luxemburger Wochenblatt* 紙上において、ルクセンブルク語を用いた記事が出された。この新聞は1821年4月7日に第1号が創刊された週刊新聞であり、ルクセンブルクにおける初のドイツ語新聞である。8ページからなるこの新聞は、政府や官庁からの布告や通知、地域の情報、出生や洗礼、死亡の情報などに加え、詩やアネクドートも掲載していた。詩やアネクドートもほとんどの場合はドイツ語で書かれたものであったが、時として上述のようにルクセンブルク語が用いられたのである。ルクセンブルク語による文芸

活動という面では *Luxemburger Wochenblatt* も重要な役割を担っていた²⁹⁾。

4.1 ゲオルク・ヴァイスとその活動

このドイツ語紙の発行者はフリードリッヒ・ゲオルク・ヴァイス (Friedrich Georg Weiß) という人物である。ヴァイスはプロイセン王国のプレスラウ³⁰⁾出身であり、シュタンマーと同じ1817年にルクセンブルクへとやってきた非ルクセンブルク人である。*Luxemburger Wochenblatt*の発行者でありながら唯一の編集者でもあったので、この新聞のかなりの部分がヴァイスによって書かれていた。

ヴァイスがドイツ語の詩やアネクドートをしきりに掲載したのは、文芸作品を掲載することで *Luxemburger Wochenblatt* の知名度を高めようとする狙いがあったとされる³¹⁾。しかしそれは結果としてルクセンブルク語の文芸活動を促進することとなる。

ほぼ同じ時期に展開されたヴァイスとシュタンマーの活動は、その目標や動機は異なっていた。しかしながら、新聞の発行者と教師という立場から、それぞれが目指している方向性は共通していた。また、彼らは互いに接点を持っており、部分的に協働していた。

例えば、*Luxemburger Wochenblatt* の1821年4月21日発行の第3号で、アテネ校で行われたコンサートと朗読会の様子が報じられている。これは4月12日にアテネ校のセミナーホールで開催されたものである。第1部と第2部でそれぞれハイドンの交響曲やボイエルデューのバグダッドの太守の序曲などの演奏が披露された。そして第1部と第2部の間に、生徒による朗読が披露されている。朗読の演目は以下のようなものである³²⁾。

シラー作「歓喜の歌」	朗読：エンクリンク ³³⁾
シュレーゲル作「アリオン」	朗読：テオドル・レンツ
シラー作「潜水夫」	朗読：フベルティ
「トランペット城」 ³⁴⁾	朗読：ルート
シラー作「人質」	朗読：ノイマン

ここで朗読されているのはすべてドイツ語で書かれた詩である。記事の中で指導者や教師の個人名には触れられていないが、朗読に関しては唯一のドイツ語教師であったシュタンマーの指導を受けてのものだったことは間違いない。

また、シュタンマーの門下生が *Luxemburger Wochenblatt* に寄稿したり、ドイツ語の詩を掲載したりもしていた。例えば上述のエンクリンクは1821年6月16日付の第11号に哀歌を掲載している³⁵⁾。また、マルシャンも1823年6月28日付の第26号の *Weihe meinem Vater, an seinem Namenstage, den 24. Juny.* をはじめ、少なくとも3つの詩をここで発表している³⁶⁾。このように、*Luxemburger Wochenblatt* の紙面はアテネ校やシュタンマー、あるいはその門下生らにとって、自らの活動の成果を公表する貴重な場となっていたのである。

4.2 作者不詳のルクセンブルク語詩

Luxemburger Wochenblatt を編集していたヴァイス自身も、自ら創作した詩を紙面に掲載して

いた。例えば1821年6月23日付の第12号では、*An die Zufriedenheit* という詩が掲載されている。その他にも多くの詩やアネクドーテはヴァイス自身が創作あるいは収集したものである。

ヴァイスは上述のようにプロイセンのプレスラウ出身であり、ドイツ語話者である。1821年4月14日の第2号でルクセンブルク語を含む記事が掲載されたことはすでに述べたが、1825年12月10日には *Les derniers Vœux d'un Ivrogne (En patois de Luxembourg)* 「飲んだくれの最後の願い (ルクセンブルク方言にて)」(以下、*Ivrogne* とする) が掲載される。マイヤーの詩集 *Schréck* が出版されたのは1829年だが、この詩は *Schréck* 出版よりもおよそ4年も早く、印刷された初のルクセンブルク語の詩であるといえる。

Ivrogne の作者には様々な説がある。ニコラウス・ヴェルター (Nicolaus Welter) はこの詩の作者はガングラーであるとしている³⁷⁾。一方でマルセル・ノペニー (Marcel Noppeney) はこの詩の作者は *Schréck* の作者、すなわちマイヤーであると主張している³⁸⁾。しかしながら、いずれの説も説得力に欠ける。すなわち、ヴェルターは具体的な根拠を一切示していない。その一方で、*Ivrogne* で用いられているルクセンブルク語の正書法が後のマイヤーのものと異なることをノペニーは認めつつも、マイヤーの正書法はまだ固まっていなかったということでこの点を不問にしている。ノペニーがこれをマイヤーの作だとしている根拠は、詩のテーマ設定の発想がマイヤーと類似しているという部分である。ただ、どのように類似しているかということには触れられていない。

ムラーは *Ivrogne* で用いられている正書法や語の使い方から、この詩を読めば読むほどこの著者はルクセンブルク人ではなく、ドイツ語母語話者なのではないかという疑念が強くなるとしている³⁹⁾。すなわち、ルクセンブルク語とドイツ語で明確に形が異なる語においてドイツ語の形を選択していることを第一に挙げている。具体的には、本来のルクセンブルク語では *nëmmen* (ただ~だけ) の代わりにドイツ語と同形である *nur* を、*Seel* (ロープ) の代わりに *Séil* (ドイツ語では *Seil*) を、*vill* (多くの) の代わりにドイツ語と同形の *viel* を用いているということである。

次に、ルクセンブルク語で *ou* と記述すべき表記法を *oo* という単母音の長音を示すような記述をしている点を挙げている⁴⁰⁾。*Ivrogne* では、ルクセンブルク語で *doudeg* (死んでいる、ドイツ語では *tot*) と記述すべき語を *doodeg* と記述するなどしている。

上記のような複数の点を手掛かりにして、ムラーはこの著者を非ルクセンブルク人のヴァイスであり、ヴァイスとガングラーは常に友好関係にあったことから、ヴァイスは時にルクセンブルク人のガングラーの助けを得ながらルクセンブルク語で詩を書くということを実現したのだとしている⁴¹⁾。

ところで、*Ivrogne* が出されるより前の1824年5月8日付の *Luxemburger Wochenblatt* 第19号で、*Correspondenz-Nachrichten* という記事にルクセンブルク語が使用されている。末尾には *Antoin Behrens, Chimaysgaas N°.474.* と記されているが、この文そのものは編集者であるヴァイスが書いたものである⁴²⁾。ここで使用されているルクセンブルク語は、やはり上で述べたような *Ivrogne* と同様の特徴が散見される。例えば、*Ivrogne* の場合と全く同様に、ルクセンブルク語の *vill* の代わりにドイツ語形の *viel* を用いているという点や、ルクセンブルク語で *Toun* (音調、ドイツ語では *Ton*) のように二重母音 *ou* で記述すべき語を *Toone* と単母音の長音で記述してい

る。これらの事実から、*Ivrogne* の作者と *Correspondenz-Nachrichten* の著者は同一人物、すなわちヴァイスであると考えるのが自然であろう。

5. 言語の「発見」と可視化

上で見てきたように、書きことばとしてのルクセンブルク語が形成されていく最初期の段階で、シュタンマー並びにヴァイスといった、ルクセンブルク語（あるいはルクセンブルク方言）を母語としない人物が重要な役割を担っていた。シュタンマーは自らの生徒に対してルクセンブルク語で創作活動をさせたり、ヴァイスは新聞というメディアを用いてルクセンブルク語を世に送り出したりといった、まさに書きことばとしてのルクセンブルク語を誕生させたといっても過言ではない。しかし、ルクセンブルク語創出のきっかけを作った2人がともに非ルクセンブルク人であったということはただの偶然の巡り合わせなのだろうか。

5.1 言語を「発見」すること

元来、ルクセンブルク語はドイツ語の西モーゼルフランケン方言に属しており、すでに述べたようにモーゼルフランケン方言とはかなりの程度共通点を有している。また、1815年のドイツ連邦規約に基づいて成立したドイツ連邦にルクセンブルクも加盟していたということは、ルクセンブルクはドイツ語国家であるということが国際的にも了承されていたということの証左である。

一方、国内的には1820年代までは領土のおよそ半分がフランス語圏であった。首都のルクセンブルク市はドイツ語圏に位置するものの、行政はフランス語で行われた。また、フランス語圏の住民はエリート層でもドイツ語を話せる者がほとんどいなかった⁴³⁾。

ルクセンブルク語は、ドイツ語の方言としてこの地で伝統的に話されてきたことばである。それと同時に、ルクセンブルクはフランス語圏とドイツ語圏が接する最前線といってもよいような地域である。15世紀末期から17世紀後半にかけてハプスブルク家の支配下にあった時期においても、ルクセンブルクはフランスと対峙する最前線を形成する地域だったということには変わりなく、フランス語及びドイツ語という2つの大言語の狭間においては豊かな方言文学を生み出す土壌に乏しかったといえる⁴⁴⁾。

シュタンマーやヴァイスはドイツ語話者ではあるが、ルクセンブルク方言とは異なる方言を母語としていた。そのため、両者にとってはルクセンブルクのことばは異質なものであったに違いない。シュタンマーは死んだような文学に生き生きとした言語の精神を吹き込むことはできないと考えていたことから、方言を重視していた⁴⁵⁾。また、ヴァイスは自らの新聞の販促目的もあって、ルクセンブルク語を書きことばとして使用した。両者はそれぞれの方法で、非ルクセンブルク人として「発見」したルクセンブルク語を、ルクセンブルク人に提示するという役割を果たしたといえる。

5.2 ルクセンブルク語の可視化

1820年代のルクセンブルクには、シュタンマーやヴァイスだけでなく、多くの非ルクセンブ

ルク人が居住していた⁴⁶⁾。彼らにとってもルクセンブルク方言は異質なものであったことには変わりない。それでも、シュタンマーやヴァイスが影響力を持ち得たのは、それぞれ教育や新聞といった、思想や理念、情報を伝達する手段を持っていたことが大きい。シュタンマーは当時のルクセンブルクの最高教育機関であり、知的エリートが集結するアテネ校で教鞭を執っていたことから、必然的にその門下生たちもまた影響力を持ちうるという正のサイクルによる大きな影響力を持っていた。一方のヴァイスは、その発行期間こそ短かったものの、初の、そして当時としては唯一のドイツ語新聞としてLuxemburger Wochenblattにより、一定の影響力を持ち得た。

ルクセンブルクを話者の意識下に浮かび上がらせ、実際の文字として、さらには1つのまとまった創作物として創出するということは、見えざるものを可視化するプロセスに他ならない。ベネディクト・アンダーソン (Benedict Anderson) が以下の引用で述べていることは、ルクセンブルク語をめぐるこの状況にも部分的に当てはまる。

これらの出版語は、三つのやり方で国民意識の基礎を築いた。第一に、(中略)出版語が、ラテン語の下位、口語俗語の上位に、交換とコミュニケーションの統一的な場を創造したことである。(中略)この過程で、かれらは、かれらのこの特定の言語の場には、数十万、いや数百万人の人々だけがこの場に所属するのだということを次第に意識するようになっていった。出版によって結びつけられたこれらの読者同胞は、こうして、その世俗的で、特定で、可視的な不可視性において、国民的なものと想像される共同体の杯を形成したのである⁴⁷⁾。

現在のルクセンブルク領における最も古い文字資料としては、8世紀まで遡ることができる。その後、12世紀以降になるとまとまった文字資料が現れるようになる。

シュタンマーやヴァイスの時代になると、それまでの「ルクセンブルク語で記録する」という目的から、次第に「ルクセンブルク語で創作する」「ルクセンブルク語で伝達する」という目的に変化してきた。彼らのこうした活動は、ルクセンブルク語に新たな生命を吹き込んだ。ルクセンブルク語は、シュタンマー並びにヴァイスといった非ルクセンブルク人の活動により、ルクセンブルク語の歴史における大きな転換点を迎えることになったのである。

6. おわりに

上で述べてきたように、シュタンマーとヴァイスがルクセンブルク語創出のきっかけを生み出すことができたのは、彼らがルクセンブルク人とは異なる視点や角度からルクセンブルク語をし得たこと、そして、自らの「発見」をルクセンブルク人に伝達し、広める手段を有していたことが重要なポイントである。

そしてふたりは、ルクセンブルク語をフランス語はもとよりドイツ語とも異なるものとして相対化し、提示していた。シュタンマーはドイツ語での創作活動の一環としてルクセンブルク語でも同様の活動をさせていたし、ヴァイスは時にドイツ語、フランス語、ルクセンブルク語

を相互に織り交ぜた記事を書いたり、あるいはすべてルクセンブルク語で書かれた詩をドイツ語新聞紙上に掲載したりといったように、ドイツ語とは異なる存在としてのルクセンブルク語を生徒や読者に意識させ、それを有効に活用していた。

シュタンマーにせよヴァイスにせよ、それぞれがルクセンブルク語に対して影響力を持ち得たのは、必ずしも非ルクセンブルク人だったからではなく、彼らの職業によるところが大きい。それでも、ルクセンブルク語を「発見」し、ドイツ語や周辺のドイツ語方言と相対化したというそもその根底については、非ルクセンブルク人である彼らが異質な言語と遭遇するによって新たな気づきが誘発されたという部分も大きい。また、シュタンマーとヴァイスの協働や、二人の影響を受けたマイヤーやマルシャン、テオドール・レンツといった若い世代の活躍が相乗効果となり、ルクセンブルク語の発展へとつながっていったといえる。

注

* (要約の日本語訳) アントワヌ・マイヤーのルクセンブルク語によって書かれた初の詩集である *E Schrëck op de Lëtzebuurger Parnassus* 以降、今日までに多くのルクセンブルク語の書籍が出版された。ルクセンブルク語史の初期において重要な役割を担ったのが非ルクセンブルク人であるハインリッヒ・シュタンマーとフリードリッヒ・ゲオルク・ヴァイスである。本稿では、ルクセンブルク語の成立過程において両者がどのような影響を与え得たのかを明らかにすることを目的としている

- 1) 実際に、ドイツ語のモーゼルフランケン方言とは共通の特徴をかなり多く有している。
- 2) 正式には「言語の規制に関する 1984 年 2 月 24 日法」(Loi du 24 février 1984 sur le régime des langue) という。この法律の第 1 条で、La langue nationale des Luxembourgeois est le luxembourgeois (ルクセンブルク人の国民の言語はルクセンブルク語である) と規定されている。また第 2 条では立法言語としてはフランス語を優先すること、第 3 条では行政言語としてフランス語、ドイツ語、ルクセンブルク語を使用するというように、言語の使用領域が規定されている。
- 3) 現在ではこの 3 言語の使用域に大きな変動が見られる。とりわけルクセンブルク語が使用される場面が広がっている。
- 4) 唯一の例外として、人口 400 人ほどのラゾバージュ (Lasauvage) 村がある。この地域は伝統的にフランス語圏に属していた。
- 5) 小規模な言語であるが、ルクセンブルク語にも方言は存在する。しかし、ここで問題としているのは言語間の大きな隔たりが存在するか否かということであるので、方言の問題は考慮しない。
- 6) 当時のルクセンブルクでは自らの言語を「ルクセンブルク語」とする認識はほぼ皆無であり、あくまでも「ドイツ語の方言」であった。また、当時のルクセンブルク大公国はドイツ連邦にも属していたことからわかるように、国際的にもドイツ語圏であった。そのため、ここでは「ドイツ語圏」とする。
- 7) ヴァイスの氏名には様々な表記がみられる。例えばヨゼフ・ヘス (Joseph Hess) は Kasper Gottlieb Weiß としている [Hess (1946) p.36.]。また、1821 年のヴァイスの息子の出生届には Georges Gottlieb Frédéric Weiß と、1825 年のヴァイスの娘の出生届には Georges Frédéric Gottlieb Weiß という表記がある [Muller (2004) p.96.]。ただし、この出生届はフランス語で作成されているため、Georg と Georges, Friedrich と Frédéric の表記の相違は言語の相違によるものである。
- 8) 当時のマイヤーの詩人としての評価は田原 (2014) pp.77-80 参照。
- 9) この正書法集 *Versuch über die Orthographie der luxemburger deutschen Mundart* はディックスの本名であるエドモン・ド・ラ・フォンテーヌ (Edmond de la Fontaine) 名義で出版された。なお、マイヤーの正書法及び正書法論議の詳細は田原 (2009) pp.53-55、田原 (2014) pp.80-85 参照。
- 10) 例えば雑誌 *De Jongletzeburger* や新聞 *D'Natio'n* などでディックス/レンツ正書法が採用されていた。

Newton (1998) pp.148-153 参照。

- 11) 具体的な書評の内容については Goetzinger et.al. (2009) p.111 などで紹介されている。
- 12) Berg (1993) p.17.
- 13) シュタンマーの経歴については主として Mannes / Muller (2009) pp.6-24 による。
- 14) この当時のルクセンブルクは独立国だが、オランダ王がルクセンブルク大公を兼ねる同君連合であった。君主であるウィレム 1 世 (ギョーム 1 世) はルクセンブルクをあたかもオランダの一部のように扱ったため、オランダ語が必修言語に加わった。
- 15) 当時のアテネ校のドイツ語ポストを巡っては Weber (1992) pp.222-224 に詳しい。なお、この当時のアテネ校では主要 4 系統が設定されていた。すなわち古典語 (ラテン語, ギリシャ語), 現代語 (フランス語, フラマン語), 自然科学系 (数学, 物理), 人文科学系 (歴史, 地理, 神話学) である。[Tausch, Gérard (2005) p.144.]
- 16) Mannes / Muller (2009) pp.47-51.
- 17) ルクセンブルク三大詩人の一人であるミシェル・レンツとの混同を避けるため、以下においても「テオドル・レンツ」と表記する。
- 18) Mannes / Muller (2009) p.90.
- 19) 本記事の詳細については田原 (2014) pp.74-75 参照。
- 20) Welter (1929) pp. 59-61.
- 21) Firmenich (1866) p.x.
- 22) Muller (2007) p.37.
- 23) 作者不詳の詩の表記法の分析は Muller (2007) pp.38-45 参照。
- 24) 例えば、作者不詳の詩では *weï* (「どのように」という意味の疑問詞, ドイツ語では *wie*) と表記されているが、ガングラーおよびマイヤーは同じ語を *wé* と表記している。Muller (2007) p.41.
- 25) マルシャンの詩は Welter (1929) p.70 参照。
- 26) Muller (2004) p.29 参照。
- 27) ウィレム 1 世はオランダ王とルクセンブルク大公を兼ねていた。すなわち、この当時のルクセンブルクは形式的には独立国であるものの、オランダとの同君連合であった。
- 28) Mannes / Muller (2009) p.121.
- 29) 新聞事業としてはしかしながら失敗に終わる。発行から僅か 5 年余りの 1826 年 7 月 8 日号をもって廃刊となった。
- 30) 現在のポーランド・ヴロツワフにあたる。
- 31) Mannes / Muller (2009) p.92.
- 32) *Luxemburger Wochenblatt* 1821 年 4 月 21 日号, p.2 に詳細が掲載されている。
- 33) 歴史学者のヨハン・エンクリンク (Johann Engling) を示している。
- 34) 記事に作者名が記載されていないが、これはテオドル・ヘル (Theodor Hell) 作の詩である。
- 35) これはアテネ校の同級生であったヨハン・ペーター・ロイター (Johann Peter Reuter) の死を悼んでのものである。
- 36) Mannes / Muller (2009) p.95.
- 37) Welter (1929) p.75.
- 38) Noppeney (1930) p.340.
- 39) Muller (2004b) p. 84.
- 40) Muller (2004b) p. 84.
- 41) Muller (2004b) p.111.
- 42) Hess (1946) p.36.
- 43) Trausch (1999) p.71.

- 44) 裏を返せば、異なる言語や文化、価値観が会う地域であった。1920年代にアリーヌ・マイリッシュによってルクセンブルク市郊外のコルパハで運営されていた文化的サロンは、ルクセンブルクの多様性という特質をよく表している現象と見てよいだろう。なお、アリーヌ・マイリッシュの文化的サロンについては津田（2014）に詳しい。
- 45) Mannes / Muller (2009) p.105.
- 46) 例えば、ルクセンブルクに駐屯していたプロイセン軍などの存在がある。
- 47) アンダーソン（1997）p.84。なお、中略は筆者によるものである。

参考文献

- ジルベール・トラウシュ（1999）[岩崎允彦 訳]『ルクセンブルクの歴史』 刀水書房。
- 田原憲和（2009）「ルクセンブルク語母音にみるディックスとハルトの言語感覚の親近性」『Seminarium』第31号、大阪市立大学ドイツ文学会、pp.51-74。
- 田原憲和（2014）「アントワヌ・マイヤーとルクセンブルク語」『立命館経営学』第52巻第4・5号、立命館大学経営学会、pp.73-92。
- 津田雅之（2014）「1920年代のルクセンブルクにおけるアリーヌ・マイリッシュのサロン」『ルクセンブルク学研究』第5号、ルクセンブルク学研究会、pp.21-49。
- ベネディクト・アンダーソン（1997）[白石さや・白石隆 訳]『増補 想像の共同体』、NTT出版。
- Berg, Guy (1993) *Mir wëlle bleiwe, wat mir sin*. Max Niemeyer Verlag, Tübingen.
- Firmenich, Johannes Mathias (1866) *Germaniens Völkerstimmen. Sammlung der deutschen Mundarten*. Band 3. Verlag von Friedberg & Mode, Berlin.
- Goetzinger, Germaine / Muller, Roger / Sahl, Nicole / Weber, Josiane (2009) *Dicks 1823-1891*. Mersch.
- Hess, Joseph (1946) *Die Sprache der Luxemburger*. Verlag Pauö Bruck, Luxemburg.
- Mannes, Gast / Muller, Roger *Heinrich Stammer und der Bund Polyhymnia*. Centre national de littérature. Differdange / Mersch.
- Muller, Roger (2004a) *Antoine Meyer (1801-1857)*. Centre national de littérature, Mersch.
- Muller, Roger (2004b) War der Initiator lëtzebuergescher Dichtung ein Nichtluxemburger? In: *nos cahier*. Nr.2. pp. 81-114.
- Muller, Roger (2007) Theodor Lenz (1801-1823). — Ein neuer Name am Anfang lëtzebuergescher Dichtung. In: *nos cahiers*. Nr.2. pp.37-54.
- Newton, Gerald (1988) The spelling of Luxemburgish. System and development since 1824. In: Newton (ed.) *Essays on Politics, Language and Society in Luxemburg*. The Edwin Mellen Press, New York. pp.135-161.
- Noppeney, Marcel (1930) Littérature luxembourgeoise d'il y a cent ans. In: *Luxemburger Illustrierte*. Nr.22. Le 25 Novembre 1930. pp.339-340.
- Trausch, Gérard (2005) L'Athénée de Luxembourg et le régime néerlandais 1815-1830/39. In: *Hémecht*. 57.Jahrgang, Heft 2. pp.133-164.
- Weber, Josiane (1992) Zur Entwicklung des Deutschunterrichts in Luxemburg von 1817-1850. In: *Recré*. Nr.8. pp.231-286.
- Welter, Nicolaus (1929) *Mundartliche und hochdeutsche Dichtung in Luxemburg*. St. Paulus-Gesellschaft, Luxemburg.